

## 書 評

### Robert D. Aguirre, *Informal Empire: Mexico and Central America in Victorian Culture*

(University of Minnesota, 2005)

崎山 政毅

本書は1821年から1898年、つまりメキシコ独立からアメリカ＝スペイン戦争までの時期における、イギリスにおけるメキシコ・中米のイメージを対象にしている。そこで問題となっているのは、「帝国の眼差し」が欲望する「対象」であり、ヴィクトリア朝イギリスがいかにかメキシコや中米をそのイメージのなかにとらえたのか、という表象の政治である。

まずは本書の意義を述べておく必要があるだろう。

ヴィクトリア朝と同時代のラテンアメリカに対しては、たしかに、イギリスのプレゼンスはめだたない。それは言うまでもなく、ウィーン体制の混乱について独立がなされるまで、スペインやポルトガルの支配が存続したためにほかならない。また、ヴィクトリア朝時代末期にあつては「棍棒外交」とも称される「カリブ海政策」を一大契機にアメリカ合衆国が前景化していったのと裏腹に、イギリスが「後景」に退いたからである。

だが、19世紀のイギリスは、ジャマイカを拠点にカリブ海域に影響をおよぼし、現在のメキシコから中米地峡にいたる地域に、局所的かつ間接的ではあつても、ときに決定的ともいえる関連を有していた。

たとえば、中米カリブ海沿岸のいわゆる「モスキート・コースト」は、その歴史において強烈なアングロ・イデオロギーの影響を被っている。また、グアテマラに隣接しユカタン半島の東側を占めるベリーズがなにゆえに英語を国家の公用語としているのかと問うたとき、1981年に独立した中米でもっとも新しいこの独立国の旧名が「英領ホンジュラス」であつたことを想起すれば、その答えは明らかだろう。

しかし、イギリスとこの地域との歴史的関係をめぐる研究や、当時のイ

ギリスがいかにかこの地域を受けとめていたのかについての分析は、これまでほとんどなされてこなかった。その意味で、本書は、後述するようにじつに様々な点で問題含みではあるが、オリジナルなものと言ってよい。

また、イギリスの社会史家マーカス・レディカーとピーター・ラインボウの編になる『多頭のヒドラ』(2001)のようなトランスアトランティックな観点からの帝国史や、グローバル・ヒストリーにおける「接続された複数の歴史」(connected histories)の提起などにも連結しうる観点を本書は含んでいる。

さて、本書の論述の眼目は、むろんのこと、メイン・タイトルが示す「非公式帝国」という概念にある。アギーレが用いているこの概念は、サー・ウォルター・ローリーの『広大で豊かな、美しきガイアナ帝国の発見』(Discoverie of the Large, Rich and Bewtiful Empyre of Guiana)(1596)において提出された、「破瓜を待つ処女膜のごとき国」という観念の延長線上にとらえられている。表象分析・批判をもとに「非公式帝国」概念をある意味で「脱臼」させるような設定になっているわけである。

そのため、序章では、「自由貿易帝国主義論」などが提示する、イギリスの政治的・経済的・文化的な事物への態度が「撒種=普及」したとする考えは中心から周辺への一方通行の歪んだ把握だという批判がなされる。そして解明されるべきは、イギリスとメキシコ・中米との間に生じた人・モノ・資本・思想の往還運動によって相互的に構築され形成された中心周辺の関連なのだ、と著者アギーレは述べる。

そのさい焦点化されるのは、イギリスにおけるメキシコ・中米イメージ形成の基礎をなす、大西洋を越える交換を介した意味と価値の転換の政治とあってよいだろう。そして、著者の観点を分節化するために持ち出されるのは、1821~1898年のメキシコ・中米へのイギリスの関わりについての「いくつかのエピソード」への限定である。

こうした限定の上で導入されている理論的道具立ては、アルジュン・アパデュライが『物象の社会的生』(The Social Life of Things)(1983)で述べた「商品化」(commoditization)における「価値の政治」(Politics of Value)や、メアリー・L・ブラットが『帝国の眼差し』(Imperial Eyes)(1987)であつかった旅行記の語りを対象とした「接触領域」(contact zone)における「文化変容」(transculturation)の解読といった、文化研究やポストコロニアル研究の成果である。

たしかに、文化研究やポストコロニアル研究からすぐれた成果がいくつ

も生まれており、それを援用することには一定の意味があるだろう。アパデュライの(若干心理主義=文化主義的な)「価値の政治」にしても、ブラットの「接触領域」における歪んだ合わせ鏡のごとき相互的な「文化変容」にしても、十分に有効な理論的武器たりうる。では、アギーレによるそれらの導入は、はたして成功裡に彼の著書を完結させているだろうか？

結論を先に述べてしまうと、本書は野心的な試みであることに疑いを容れられないが、その内容についてはきわめて不十分な諸点が散見され、概評的にいえばけっして成功作だとはいえない。「非公式帝国」なるメイン・タイトルも、十分な批判的効果を維持しえていない。

以下、評者が読んで疑問を感じた論点を挙げておきたい。

まず地域に関する疑義である。著者アギーレは対象となる表象にかかわる地域を「メキシコ・中米」と明確に示している。そして、具体的な考察の対象となっているのが、その地域が生み出したアステカおよびマヤの「文明の遺産」である。ところが彼はマヤあるいはアステカという具体的形容をつうじて対象を画定し際立たせるのではなく、「ラテンアメリカ」という呼称を用いて拡散的に考察をくりひろげている。

この「ラテンアメリカ」という語には、当然のことながら「メキシコ・中米」も含まれるし、マヤやアステカの文明も民族も含まれる。だが、「ラテンアメリカ」という、きわめて多義的で多様性にみち、歴史的・社会的諸力がさまざまな次元においてせめぎあう地域名は、マヤやアステカへ収斂すべき眼差しを無化し、明晰に述べられるべき考察を中途半端なものにしてしまいかねない。

さらに、「メキシコ・中米」という、近代史においてはじめて確定された領域への無邪気な言及についても、批判的に読みをすすめなければならないだろう。

現在の中米五カ国を包含した「中米連邦共和国」(1823~39)がなにゆえにかくも短命に終わったのかといえば、その原因には、激烈な政治的利害の対立のほかに、統合主義をゆるさないだけの矛盾と危機をあらかじめ内在させた複数性・多様性があったからである。

ならば、アギーレが自らの課題を忠実にはたそうとするならば、この複数性・多様性がヴィクトリア朝時代の「非公式帝国」にいかに変形されながら導入され、さらにそれが強力な観念として普及されたのかを抉り出さなければならないはずである。ところがそうした過程についてはほとんど言及がない。まるで諸事物の認識が彼の地からイギリスへと突然テレポー

トしたかのように、つまり連関の中での帝国史としてではなく、どこかでその源を喪失しイギリスの中に一国的に切断され閉じられてしまった表象であるかのような取り扱いが目立つばかりなのである。

そしてもしイギリスが受けとめたイメージの圏域に一括りの「中米」というカテゴリーがとどまっているならば、問題を分析対象へと追いやることも可能だろうが、著者もまたこのカテゴリーを相当程度無批判に受容していると思われる。

ことは「メキシコ」についても同様だ。アギーレがとりあつかっている時期は、まさにメキシコが統合的國家たりえなくなるような、メキシコ＝アメリカ戦争（1846～48）、ユカタン半島での人種戦争であるカスタ戦争（1839～1901）、さらにメキシコ干渉からマキシミリアン皇帝体制の成立と崩壊（1861～1867）といった大きな危機が次々に生起していた時代であった。

またメキシコ最南部のチアパス州などは、アギーレが強調する先住民族の存在を考慮にいれるならば、「南」からの文脈において、すなわちメソアメリカの歴史的・文化的・民族的連関においてとらえられねばならない（カスタ戦争の重要な史料である、当時のイギリス人のチアパス旅行記などがそれを証拠づけている）。

こうした点を考えれば、「メキシコ・中米」という地政学的カテゴリーを無邪気に採用する姿勢が本書をつらぬいていることは、歴史的な文脈を恣意的に切断する以外の効果を生むものではなく、きわめて残念なことと言わざるを得ない。

次に問題としたいのは、ときに見られる「高踏的」解釈のアクロバットである。イギリスにおける先住民表象に対する人種主義的な態度を論じた第4章の結論ちかくなどがそのわかりやすい事例だろう。今のわれわれにとっては当然である人種主義批判の観点からの分析をくりひろげ、いざ結論という段にいたって、アギーレは彼の論をささえる参照項として、1992年の「コロンブス新大陸到達500年」に抗議するココ・フスコとギジェルモ・ゴメス＝ペーニャの二人のチカーノ／チカーナ・パフォーマンス・アーティストの「作品」を持ち出すのである。「非公式帝国」はどこかに雲散霧消し、ヴィクトリア朝イギリスから現代のアメリカ合衆国への突然の飛躍がとってかわるわけである。善意にみちた読者であっても、このような知的ジャグリングに出会っては歴史性の欠如を見出さざるをえないのではないか。

とはいえ、ある種の文化研究・ポストコロニアル研究としてみれば、本書はこれまで論じられてこなかった対象をとりあげているがゆえに、一定の知見を提供してくれることを指摘しておかなければならないだろう。

とくにそれは第4章「フリーク・ショウ」に顕著である。この章では、「アステカの子供たち」とよばれた、マキシモとバルトラという二人の「小人症」の若者が主にとりあげられている。アギーレはまず「帝国の欲望」を人種主義的な民族学的好奇心に裏打ちされた「記念品」の獲得・収集に定式化することで、その内容を単純なレヴェルに格下げする。そのうえで、ヴィクトリア朝にあっては「帝国の欲望」は事物から人間へと拡張していき、「アステカの子供たち」を一個の代表例とする、人種的退化の証拠へとひとえに転換させるばかりのヒューマン・スペクタクルへと「メキシコ・中米」の人間存在を物神化させた、と述べる。この分析結果に異議はない。しかし既視感以外の何ものかをこうした紋切り型「批判」から受け取るとはじつに困難だ。

それに比べると、終章は問題と言わざるを得ない。そこではライダー・ハガードの『モンテスマの娘』（1894）が分析の俎上にのせられ、この作品が描き出すイギリスにとってメキシコが占めた位置をめぐる物語は「非公式帝国」の「喪失」を端的に表現したものだとされる。「喪失」とは、コルテスの征服以来、現実のイギリスが直接暴力的に収奪しえなかった現実の富についての問題であり、『モンテスマの娘』はそうした「財宝」への「帝国のノスタルジア」が充溢したテキストなのだ、という読みの結論が導き出される。

過去に奪えなかった富に憧れ、その「喪失」に悶々とする？ 何というロマンティズム。ライダー・ハガードの作品がまさしく「帝国の大衆文学」であり、それがロマンティックな物語性を有していることは多くが認めるところだろう。だが著者の言うように、そこに「帝国のノスタルジア」を読み解くことができるのだろうか。読みの方法が明確でないだけに、この問いは宙吊りにされたままである。

そして、「帝国のノスタルジア」なる概念（？）の脆弱さも気にかかる。ノスタルジアどころか、ちょうど同じ時期に進んでいた「非公式帝国」の諸状況は、後にJ・A・ホブソンの『帝国主義論』（1902）にみごとに結実したように、清潔な植民地支配という基準のもとでの「自己批判」さえ許す段階に達していた。ノスタルジアに苛まれたのはかつての宗主国スペイ

ンであり、けっしてイギリスではなかったのである。では、この概念(?)によってアギーレは何を指し示そうとしたのだろうか 残念ながら、十分な回答を本書そのものから汲み取ることはできないだろう。

著者アギーレの主観的な善意と批判への志向性は疑うべくもない。だが、現実の「非公式帝国」は、彼が思うよりもはるかに複雑な、歴史的ヘゲモニーの織り成す動的機構だったことは言うを俟たない。

以上、非常に辛口の評となったが、本書の価値をわれわれの観点から考え直すことは無意味ではないだろう。それは本書が提示する薄い内容ではない。本書の価値とは、その失敗によってあぶりだしのように浮かびあがってくる未開拓の領野にほかならず、それはまたわれわれの新たな対象なのだということを明らかにしてくれている点にこそ存在している。

(立命館大学助教授)

## Norman Etherington ed., Missions and Empire (Oxford University Press, 2005),

並河 葉子

本書のタイトルにある「宣教師」と「帝国」という、二つのありきたりのキーワードのありふれた組み合わせから想像されるのは、宣教師がイギリス帝国の拡大にどのような貢献をしたのかについての研究である。しかし、本書はそういった政治的な議論に限定されない、幅広いテーマを扱っている。19世紀第四四半期から戦間期までのいわゆる「帝国主義の時代」をはるかに超えて、1700年から20世紀半ばの脱植民地化の時代までという非常に長いタイムスパンを射程に入れていることにもあきらかである。14章からなる本書は、「伝道事業」をクロノロジカルに概観するのに一つの章が割かれているほかは各章に異なるテーマが設定されている。取り上げられているのは、英領アメリカ、白人入植地、インドやイギリス国内という地

域別のミッション活動の実相についてのほか、ミッションにかかわる女性たちの存在について、教育や医療事業について、言語学、人類学といったミッション活動にもなって生成してきた新しい学問について、また非ヨーロッパ世界各地でみられた独自のキリスト教の運動について、あるいは非植民地化とその後のミッション活動のあり方についてなど多岐にわたる。「ミッション事業」を軸にすえた一つの本のなかに、地域、時代、学問領域などまったく性質の異なるキーワードをもつ章を配置すると、イギリス帝国を中心として世界各地でこの3世紀の間におこった変化とその意味はどのようにみえてくるのかを多角的に検討しようというのである。

タイトルからは想像しにくいのが、実はこの本の内容の組み方は従来の帝国史からみても、ミッション史からみてもかなり斬新であるといってよい。ただし、個別の章で述べられている事実そのものは、最近の研究を踏まえたものとはいえ、とくに目新しい事柄が述べられているわけではない。では、この本の特色とは何か。帝国史とミッション史および女性史という、ミッションを対象とする三つの歴史研究分野の動向との関係を述べることにしよう。

まず一つ目、「イギリス帝国史」の文脈であるが、そもそも本書が編纂されるきっかけとなったのは、オックスフォード帝国史シリーズにはミッションについての論及が著しく欠落しているという著者たちの反省である。18世紀以来イギリスが海外との接点を増す中で、政治家や商人たち、帝国官僚にまさるとも劣らないほど密なかかわりを帝国と持ち続けたにもかかわらず、宣教師や伝道事業が帝国史においてマージナルな位置しか与えられなかったのにはそれ相応の理由がある。というのも、イギリス国内で伝道事業を立ち上げた人びとも、海外に派遣された宣教師もほとんどが非国教徒であるか、国教徒であっても非国教徒との連携に積極的な福音派の人びとであって、イギリスの政治的意思決定に大きな力を持っていた伝統的なジェントルマン層とはいえない。かれらの活動には既存の体制に対する批判の意味がこめられており、体制派とは一線を画するグループであったことから、帝国における宣教師と帝国当局の関係はつねにアンビバレントなものにならざるを得なかったためである。しかし、それは帝国のなかで、またときに帝国の領域を超えて展開した宣教師たちの活動が帝国史にとって意味がないということではまったくない。それでは、一体かれらは実際には何をしたのだろうか、またそれは帝国のあり方を、イギリス本国と帝国との関係をどのように変えたのだろうか。本書はそれを問うのである。

編者がオーストラリア人であるのをはじめとして著者の大半もイギリスではなくオーストラリアやアメリカの出身者である。また、本の企画そのものがオーストラリアで出発し、その後著者たちが議論を重ねた場合もパーゼル(イギリスの伝道協会にとっては欠くことのできないパートナーの拠点)などイギリス国外であったことなども、本書がオーソドックスな帝国史とは一線を画する視点を提供してくれていることを物語っている。本国発の人材と情報が帝国世界に大きな変化をもたらしたという通り一遍の解釈に著者たちは満足しない。大量の宣教師が海外に派遣され、帝国内外で活発なミッション事業が展開された19世紀から20世紀初頭のあと、ミッションの使命、プレゼンスは著しく低下したと従来のイギリス帝国史は述べてきた。しかし、イギリス発のミッション活動が相対的に衰退した要因の一つは、帝国各地のミッションが本国から自立したことである。終章で述べられているように、当初イギリスから帝国へと向いていたミッション活動のベクトルは、脱植民地化の時代を経た今、まったく逆の非ヨーロッパ世界からヨーロッパの再キリスト教化へと向かっている。帝国という枠組みとミッションは連動せず、帝国亡き後、ミッション活動は方向を変え、ダイナミックな動きを続けていることなど、これまでのイギリス帝国史があえて指摘することのなかった事実にも目が向けられている。

それでは、二つ目の従来のミッション史と本書の違いというのは何であろうか。近年イギリスではミッション史、つまり宣教の歴史についての研究が空前の活況を呈している。イギリス最初の海外伝道協会である聖書知識普及協会(SPCK)と福音普及協会(SPG)は17世紀から18世紀への世紀転換期に相前後して設立され、18世紀のイギリスにおける福音主義の復活といわれる動きに触発されて18世紀末から19世紀初頭にかけて福音主義的な海外伝道協会の多くが創設された。つまり、20世紀から21世紀への世紀転換期というのはイギリスにとってちょうど海外伝道開始300周年、また既存の伝道協会の多くにとって設立200周年の節目なのである。各伝道協会は、この二世紀間にどのような活動を展開したのか、また、非ヨーロッパ世界においてどのような成果を挙げてきたのかを検証する一環として、イギリス内外の歴史学研究成果を採り入れながら伝道史、あるいは宣教師の歴史を編纂している。ただ、一般的にミッション史にかかわる研究は、特定の伝道協会の活動について、多くはその協会の関係者が著したものがほとんどである。伝道協会が伝道事業を総括するにあたって主たる目的である布教活動という宗教的側面に重点が置かれるのはやむをえないのかもしれない



い。しかしながら、ミッション活動が純粋なキリスト教布教を超えた幅広い領域をカバーしていたこと、非ヨーロッパ世界における影響は地域によっては後者のほうがむしろ大きいことは日本をみれば明らかである。教派横断的に編纂された最近のミッション研究には、そうした宣教師の非宗教的活動についてとりあげようとする姿勢もみられる。しかし、そのほとんどは、個別の地域、協会のケーススタディの集積の域を出ていない。

本書では、伝道事業以外のテーマを設け、宣教師が果たした多面的な役割を述べることで、宣教師たちがもともと単なるキリスト教の布教者というよりは学校制度や病院といった施設の整備にとどまらず言語学や人類学など各学問分野が確立するきっかけをつくった人びとであることを指摘し、各学問分野のなかでは必ずしも正統な評価を得ているとはいえない彼らの業績を検証しようとしている。

最後に、従来との女性史との関係についても簡単に述べておきたい。イギリス本国における女性史は、基本的にフェミニズム運動と軌を一にして発展してきたため、フェミニズム運動にかかわる分野での研究が多くを占めている。イギリス本国で、伝統的なチャリティの領域に属する海外伝道事業支援に当たった女性たちについての研究は近年進展してきているとはいえ、帝国の女性たちを対象とした研究はまだ限られている。

一方、ミッション史のなかでも、ミッションにかかわる女性たちの研究は緒についたばかりである。伝道事業専心が基本的な姿勢であったイギリスの伝道協会にとって、女性たちが主体的にかかわった教育や医療などの非宗教的な活動は周縁的なものとされ、女性たちの貢献は認識していても彼女たちはあくまでも補佐的な役割であったとされてきたからである。

しかし、イギリスの女性史の発展に刺激されはじめた帝国の女性史研究ではミッションにかかわる女性たちが中心的なテーマになっている。帝国において現地の人びとと実際に日常的に接触したヨーロッパ人はホワイト・コロニー以外では宣教師の妻や女性宣教師たちにほぼ限られており、現地女性たちがヨーロッパ人との接触を現実を持つ場合はほとんどミッションが運営する学校や病院などに限定されていたからである。帝国で学校を開設したり、医療行為を行った女性たちには、専門的な知識と技能が要求された。帝国は、本国であれば男性に独占されていた医師などの専門職を女性たちに解放し、彼女たちに新しい活動領域を提供していたのである。本書はこうした帝国の女性史研究の成果をいち早く取り入れている。

章ごとに極めて限られた紙数のなかでこれまで触れられなかった宣教師

たちの活動の性質やミッション事業の本質を手際よく紹介している点は高く評価できる。惜しまれるのは、帝国からイギリスへの情報の流れ、本国への影響は脱植民地化の時代に始まったことではなく、18世紀以来の帝国との交流は常に相方向の情報交換の歴史であったこと、帝国との接触は本国のシステムにも多大な影響を与えたことについての踏み込んだ言及がなかったことである。たとえば本書にもあるように19世紀後半に確立していく学問の多くは言語学や人類学、(本書には述べられていないが)地理学など分野を問わず、その草創期を飾る人びとの多くが宣教師であった。彼らはたまたま宣教師であったのではなく、宣教師というのは単なる布教の枠を超えた幅広い活動をすることが当然であって、かれらであるからこそなしえた業績も多いことをわれわれは今一度認識し、近代における知の確立において決定的な役割を果たしたかれらの業績を位置づけなおす作業が必要であろう。あるいは、イギリス国内のフェミニズム運動との関連から述べられることの多かった女子の教育改革は、帝国のニーズという具体的な要求が前進への大きなファクターであったことは見逃すべきではない。

とはいえ、全体として本書の取った先鋭的なスタイルの価値は高く評価されてしかるべきである。従来帝国史およびミッション史研究の枠組みでは周辺的な位置づけであった様ざまなトピックを取り上げ、帝国とイギリス本国の社会にみられた変容の背景や意味、連続性などを検証するうえでミッション事業が不可欠であることを示すばかりでなく、今後さらに豊かな成果が期待できる研究領域であることを示唆してくれている。また各章のはじめにはその章の概説が、章末には参考文献リストが付されており、ミッション史および新しい帝国史研究の入門書として簡便な好著であるといえよう。

(神戸市外国語大学助教授)

Catherine Gallagher, *The Body Economic: Life, Death, and Sensation in Political Economy and the Victorian Novel*  
(Princeton University Press, 2006)

新野 緑

本書は、グリーンブラットとの共著 *Practicing New Historicism* (U of Chicago, 2000) などでも知られる著者の第3作目の単著。19世紀イギリスをめぐる学際研究のもっとも先鋭なひとつの形を示すものである。経済学と文学は長い間その対立関係のみが強調されてきたが、ここ30年の間に、新マルクス主義やフーコー、ブルデューなどの影響で、文学の歴史化、あるいは社会化の動きが高まり、同時に、経済史の分野でも、政治経済学を道徳哲学という18世紀後半の知的活動の一部と位置づける動きが活発になって、両者の歩み寄りが顕著になった。そう言う著者が最近の研究成果を踏まえて、19世紀イギリスにおける文学と経済学の交渉の歴史を詳細に辿り、生理学や心理学、文化人類学にも及び、当時の知的活動の包括的かつダイナミックな発展の歴史を描き出そうとしたのが本書である。

序章で本書全体の見取り図を示した後、第1章では、ロマン主義と政治経済学との根本的な類似点と、それにもかかわらず両者の対立が生み出された複雑なコンテキストが、マルサスの *Essay on Population* やリカードの「労働価値論」に対するサウジーやコールリッジの批判、そしてナポレオン戦争前後の経済政策に関する論争から解き明かされる。政治経済学とロマン主義の根源的な類似が、究極的な価値の概念を超越的な精神の領域から有機的な「<sup>ライフ</sup>生命」の領域へと移した点にあるとして、両者を同じ19世紀の「<sup>オーガニスム</sup>有機体説」の領域内に位置づけ、第2章において、政治経済学の「有機体説」を形作る主要な二つのプロットを、経済が「生命」を循環させる方法を考察する“bioeconomics”と、快や不快、幸福や不幸などの感情がいかに経済活動を刺激し、また同時にそれによって変形するかを論じる“somaeconomics”とに分類する。著者によれば、マルサスの人口論に端を発する“bioeconomics”とベンサムに起源を持つ“somaeconomics”は、そのいずれもが身体を備えた自然な人間のあり方を重視する点で、政治経済学を

19世紀の様々な「<sup>ド・ユーマン・サイエンス</sup>人間科学」に結びつけた。以下の第3章から第6章において、政治経済学のその二つの流れが、19世紀の後半に、文学を中心とする多様な学問領域においてどのような形を取って現れたかが、ディケンズとジョージ・エリオットの具体的な作品分析を通して語られる。本書の表題であるThe Body Economicは、したがって、単なる経済学の一側面を言うのではなく、活力や感情といった人間の身体に深く関わる要素をすべての価値のよりどころとして、その生産や分配、交換の営みを考察するあらゆる学問領域を包含する言葉とも考えられよう。

ディケンズのHard Timesを扱う第3章では、娯楽を称揚するはずのこの作品を覆う「<sup>メランコリ</sup>憂鬱」に着目する。カーライルの労働の福音やマカロックの欲望の経済学と比較しながら、サーカスを中心に娯楽と労働の二項対立を提示しつつそれを解体するこの小説では、「あらゆる行為は経済的文脈に置かれると苦痛を目覚めさせる」という新たな労働の定義が、従来の「労働価値論」への逆説として提示され、そこに文学と経済学の接点と分岐点、さらにロマン主義とヴィクトリア朝作家の相違があるとする。第4章は、ラスキンがUnto this Lastで示した“wealth”と“illth”という対立概念を手がかりに、ラスキンや彼が依存していた当時の“bioeconomics”の概念と、ディケンズのOur Mutual Friendとの類似や相違を考察する。ごみの山やテムズ河を中心に登場人物の死と再生とを語るこの物語のプロット展開と二つの象徴が、じつは消費が生み出す廃棄物が身体を活性化するというチャドウィックをはじめとする公衆衛生学のリサイクル理論を基盤としており、同時に、作品に描かれる多様な読書形態が、文学テキストを作者の活力が蓄積され、読者に伝達される、一種の「仮死状態」の商品と見るチャドウィックの理論を反映するとして、ディケンズが抱く「<sup>オーサー</sup>著者」の概念との連関を示す。

Daniel Derondaを論じる第5章では、エリオットが創作の不安を綴った“too much literature”という表現に注目し、心理学者ペインが提唱した「動機づけ」に関する「感情の相対性」と「斬新さの理論」、さらにジェヴォンズの「限界功用理論」といった当時の新しい“somaeconomics”の概念と作品との類似が跡づけられる。そして、グランドコート、グウェンドレン、デロンダという物語の中心をなす三人の登場人物がそれぞれ意志、感情、知性というペインの提唱する人間の動機づけの基本的要素を体現する物語構造と、アルカリシヤグウェンドレン、ミラーといった「演技者」とグランドコートをはじめとする「観客」とが作り出す歪んだ人物関係に、女性作家エリオ

ットが抱えていたジレンマを読み取っている。第6章では、まず、マルサスの理論が進化論的文化人類学や宗教の領域を経て、美学の領域へと入り込んでいく複雑な道筋を、ダーウィンを中心とする”bioeconomics”とPrimitive Marriageの著者マクレナンを中心とする”somaeconomics”の二つの流れと、両者の融合としてのフレイザーのThe Golden Bough、そしてその延長としてのモダニズム文学や文学批評の発展の歴史に辿る。さらに、マルサス流のジレンマが文学的想像力に入り込むいまひとつのルートとしてリアリズム小説の系譜を挙げ、エリオットのScenes of Clerical Lifeを構成する三つの物語が、いずれもキリスト教信仰の核をなす「受難」という概念を、母性や性的エネルギーに結びつけている点に着目、トーマス・チャーマーズやハーバート・スペンサーとの比較を交えながら、マルサスのプロットが宗教の世俗化に果たした役割を明らかにする。そして、「結び」において、以後の経済学が学際的交流を断とうとした理由と、それとの意識的な差異化によって文学が自己のアイデンティティを確立する過程を追い、最後に最近の学際化復活の傾向を喜んで本書は閉じられる。

このように、本書は経済学の起源と発展の歴史を、活力や感情といった人間の身体性の観点から読み直すと共に、19世紀の知的風土の中で、政治経済学が他の「人間科学」と交差しつつ、新たな物語を生み出すプロセスを生き生き描いてみせる。経済学や文学のみならず、衛生学、エコロジー、キリスト教、文化人類学、精神生理学など、19世紀のあらゆる知的活動を次々と議論に組み込んでくる著者の該博な知識と、具体的なテキストの引用の巧みさに、読者はまず圧倒されるだろう。相対立するかに見える政治経済学とロマン派とを「有機体説」によってひとつに結びつける議論に典型的に示されるように、本書の根源にあるのは、何よりも類比と対比の感覚であって、それは経済学者間の学説の微妙な相違を識別すると同時に、異なる学問領域の意外な結びつきを読み取る手がかりとして有効に作用している。こうした手法は、たとえば、Scenes of Clerical Lifeの三つの物語に同じテーマの反復と変奏とを探る議論のように、具体的な作品分析の核ともなっている。しかも、文学が経済学を対立項とすることで、自らの独自性を確立したという冒頭の主張が明らかにするように、そこに描き出されるのは、個々の学説の単なるスタティックな二項対立的分類ではなく、ある言説が他者との接触により、自身の主張や矛盾を探り、他者を内的矛盾の代替として非難しつつ、自己を確立していくそのダイナミズムである。その点、構造主義から、脱構築、そして新歴史主義批評へと向かう批評理

論の影響を見ることもできるだろう。こうして、政治経済学を中心とする19世紀の知的活動の緻密なネットワークとダイナミックな変貌の歴史が見事に提示されることになる。

このような学際研究としての本書の意義を十分に認めたいうえで、「文学」という視点から本書を眺めてみたらどうだろう。なるほど、著者のスタンスは、従来の特権化された「文学」の概念の解体を旨とするものだ。しかしたとえば、政治経済学が「単なる初期の産業資本家の弁解のひとつ」(p.2)ではなく、人間の活力や感情に根ざした19世紀の人間科学の一分野だとして、その有機的な側面を著者が強調する時、そこには文学と経済学の交渉の客観的な足跡を辿るだけではない、密かな「価値」の概念が滑り込んではいないか。たしかに、身体性という概念を導入することで、経済学が19世紀イギリスの知的活動の発展に持つ意義と作用は十分に理解できる。具体的な作品分析も人物造形から文体、作品の構造やテーマ、作家のオーソリティの概念にまで及び、作品の多様な側面を結びつける有機的な解釈がされていると言ってよい。また、たとえば、ごみの山とテムズ河をめぐる死と再生のプロットが、衛生学のリサイクル理論と結びつけられることで、作品に一種の意味の厚みと広がりを与えられることも事実だろう。しかし、サーカスが孕む労働と娯楽の概念の混淆にしても、エリオットにおける受難、とりわけ女性の産みの苦しみを介しての宗教の世俗化にしても、「文学」の分野に関しては、従来の作品解釈や作家理解の枠組みから大きく踏み出すような要素は、案外示されていないのではないか。さらに、“bioeconomics”や“somaeconomics”の系譜が、文化人類学からモダニズムを経て20世紀の文学批評にまで辿られるとき、人間の生や死、セクシュアリティや感情といった要素は、「経済学」の枠組みを徐々に薄められて、本書が主題とする経済学との交渉の意味自体が揺らぎはしまいか。とはいえ、過去の歴史的現実と文学テキストに書き込まれた断片的な事象の類似を指摘するだけの「学際的研究」が多い中で、本著が歴史と文学の有機的でダイナミックな相互テキスト性を開示する新しい学際研究の模範的なひとつの形を示していることは疑いがない。熟読に値する一冊である。

(神戸市外国語大学教授)

# Frankie Morris, Artist of Wonderland: The Life, Political Cartoons, and Illustrations of Tenniel

(University of Virginia Press, 2005)

千森 幹子

ジョン・テニエル (John Tenniel, 1820-1914) は、Lewis Carroll の二つの『アリス』作品 (Alice's Adventures in WonderlandとThrough the Looking - Glass) の92枚の挿絵画家として不朽の名声を確立しているが、実際、活躍の主要な舞台は、風刺画家としての生涯を決定づけた『パンチ』誌であった。Frankie Morrisの近著Artist of Wonderland: The Life, Political Cartoons, and Illustrations of Tennielは、テニエルと彼の作品を広くヴィクトリア時代の社会的、政治的文脈の中で捉えようとする意欲作である。本書は、テニエルの生涯と、画法、『アリス』挿絵と、『パンチ』の風刺画を論じる4部からなり、なかでも、伝記部分では、彼の家族や若い時代に関する、Morris自身が調査収集した一時資料を駆使した新事実が記載され、また、研究論文の部分では、『パンチ』の風刺画家としてのテニエルに注目し、膨大な数の『パンチ』誌の風刺画を取り上げた実証的な研究として、テニエル研究に新境地を開く意欲作となっている。さらに、200枚にも及ぶ図版と巻末の‘Appendix: A Guide to Tenniel’s Unidentified Punch Work’も、『パンチ』や政治風刺家としてのテニエルに関心を持つ研究者にとっては、有益な資料となるであろう。

Morrisは、テニエルの生涯とイラストを研究してきた美術史研究家でありアーティストであるが、本書は、彼女の20年以上にもわたる研究の集大成である。しかし、もし個人的見解を述べさせて頂ければ、キャロルとその日英図像に関心を抱いてきた私にとって、この400ページにもわたる大著は、他のテニエルや彼の『アリス』図像に関する研究書と比較すると、必ずしも常に興味深く読了できた研究書ではなかった。

おそらく、第一の理由は、研究書としての基本である先行研究への言及の不十分さ、そして、それに起因する先行論文と自説の識別が不明確かつ、曖昧である点にあると考える。テニエルに関する研究書としては、すでに、

初期のFrances Sarzano のSir John Tenniel (1948)、アリス挿絵を中心に論じたMichael Hancher のThe Tenniel's Illustrations to the 'Alice' Books (1985)、Rodney K. EngenのSir John Tenniel: Alice's White Knight (1991)、テニエルの多岐にわたる作品を美術史的観点から論じたRoger SimpsonのSir John Tenniel: Aspects of his Work (1994)、さらに近年Morton Cohen とEdward Wakelingが編集した Lewis Carroll and His Illustrators (2003)等があるが、それらへの適切明確な言及が脱落しているばかりか、Bibliographyも欠落し、Indexも不十分である点、先に述べた有益なAppendix と詳細な註とは対照的である。

第2に、本書の全体的な構成に問題がある。体系的あるいは概括的なテニエル研究書というよりも、今まで書いた論文を、適当な項目別に断片的に編集しなおした論文集といった印象が強い。例えば、第2部 Methods and Modes は、'Drawing on Wood' と 'Before Alice'の2章からなり、第3部 'Enchanting Alice'は、'The Draftsman and the Don'から 'Alice and Social Caricature'にいたる6章からなる。各論自体は興味深いのであるが、各々の論文相互の関連性が明瞭ではなく、さらに、Conclusion自体も削除されている。

また、『地底の国のアリス』(Alice's Adventures Under Ground) にそえられたキャロル自身の挿絵と『不思議の国』におけるテニエルの挿絵の影響関係に関するMorrisの説も少し強引な感じが否めない。この点については、すでに、David Lockwoodが書評('Lewis Carroll Review,' Issue 33, May 2006)の中で、詳しく指摘しているが、Alice Liddell やMichael Hancherが唱えているテニエルはキャロル自身の手書きの挿絵を参考にして、『不思議の国』の挿絵を描いたという説に、Morrisは疑義を呈しているのであるが、細部の描写は別にしても二人の挿絵の場面選択、構図などの類似はほぼ疑いの余地はない。まして、当初は挿絵も自分で描きたいと考え木版の技術さえも学ぼうと考えた依頼者であり著者であるキャロルが挿絵入りでアリスに贈った『地底の国のアリス』からの着想やアイデアを、テニエルが参考にしなかったと論証することは、キャロルの性格や『不思議の国』のイラストレーター選定に至る過程、イラストに対する熱意を考えると、無理があると考ええる。

しかしながら、上記のような欠点を持ちながらも、本書はヴィクトリア時代の社会史や政治史、そして『パンチ』に関心を持つ人々にとって興味深い書物である。



50年以上の長きにわたり『パンチ』のイラストレーターであったテニエルの風刺画は、Morris自身が本文で述べている\*ように、ヴィクトリア時代を研究する一級の資料であり、本書の価値もそこにある。

テニエルが『アリス』のために描いた挿絵の萌芽を、初期の『パンチ』の挿絵とヴィクトリア時代の文脈に求める研究はテニエル研究者としてのMorrisならではである。例えば、13章‘Harlequin Alice’では、『不思議の国』に出てくる従者のカエルや魚の顔は、当時、パントマイムで役者がかぶったカエルや魚のマスクと関連があると論じ、14章‘Alice in the Land of Toys’では、当時の子ども達が遊んだゲームやドールハウスなどの玩具や幻灯機などと、テニエルの『アリス』挿絵との関わりについて指摘している点、従来の研究では余り論じられていない。

『パンチ』に掲載されるテーマは毎週の夕食会でスタッフと共に決められるが、特に政治的なトピックのスケジュールは時間に追われ、話題決定から48時間で、原稿を製版者の元に届ける必要があった。それ故、イラストレーターは、様々な知識を記憶し、即時に映像化しなければいけないのであるが、テニエルは映像的な記憶の中に、こうした知識を整理していたと、Morrisは、第4部‘The Punch Cartoons’において述べ、その具体例を示している。例えば、ダビッドが描いたアルプス越えをする馬上のナポレオン像や、ドラクロアやジェロームなどのロマン派の作品の中で使われた英雄的な動物が、『パンチ』のなかで姿を変えて戯画化されている。ライオンは英国、虎はインド、双頭の鷲がオーストリアといったシンボルが、テニエルの得意な動物画として政治風刺に使われる実例などを、精巧に再現された図版と共に見るのは、興味深い。

さらに、本書はテニエルの風刺画と、政治的、社会的あるいは文化的な影響関係を実証的に示している点、示唆に富む。『パンチ』の風刺画を扱った第4部では、イギリスの政治家や、労働者階級、アイルランド人やアメリカ南北戦争を取り上げ、第3部では、大工や料理人などの労働者階級、法律専門家、ブルーストッキングのインテリ女性や法皇などのヴィクトリア時代では社会通念化していた固定的なイメージが、いかにアリス作品へ投影されたかを検証した興味深いソース研究である。また、アリス図像についても、彼女の頭でっかちで足の短い非現実的な体型やキャロルのアリスのグロテスクさを排した‘perfect British girl’としての描写は、『パンチ』誌に描かれた中流階級の女の子の描写を踏襲した当時の類型的表現であると指摘している。しかし、テニエルのアリス描写については、既に、キャ

ロルのテキストの幻想性を補填するテニエルのアリス描写のリアリズムと客観性が評価される一方、他の動物描写に比べて凡庸であり描写の統一性が欠如しているといった欠点が、指摘されている。もし、Morrisが、テニエルの画像を、より深い文脈、例えば、挿絵とテキストの関わりやイラスト以外の他の芸術作品などとの関わりといった多岐にわたる視点からの解釈を試み、‘cartoonist’と同時に‘illustrator’であり‘artist’としてのテニエルの作品解釈に、もう一步、肉迫していれば、本書はさらに重層的なテニエル作品論となっていたことであろう。

しかし、この書物のもっとも優れた功績は、従来のテニエル研究史の中では、比較的空白に近かったテニエルの家系や、彼の少年時代を、未発表の一時資料を使い、生き生きと再現した第一部にある。テニエルの祖父であるNoel TennielがMargaret Parkerと結婚した1776年に遡り、父John Baptist Tennielと母Eliza Mariaの結婚や住居、芸術に造詣の深い家庭環境、子供時代に片目を失明したエピソードや、画家John Martinとの交流や彼からの影響なども詳しく語られている。John Martinが描いたヴィクトリア女王の戴冠式の油彩画（1839）における寺院の台座に差し込む光の表現が、20年近くを経たテニエルのThomas MooreのLalla Rookh（1891）に影響したとするMorrisの指摘は、推論と考えられないこともないが、全体的には、従来のテニエル研究に新境地を開いた労作といえるのである。

\* His drawings epitomized middle-class thinking at a time before the burgeoning of daily cartoons in mass circulation papers would make the individual cut less weighty ... Thus they fulfil the predictions of his contemporaries and remain as unceasing source for political and social historians.’ (p.104)

（山梨県立大学教授）

Jennifer Phegley, *Educating the Proper Woman Reader:  
Victorian Family Literary Magazines and the Cultural  
Health of the Nation*  
(Ohio State University Press, 2004)

河村 貞枝

ヴィクトリア女王の治世は周知のように多種多様な定期刊行物が爆発的に増加した時代で、その間に刊行された雑誌はグレート・ブリテンだけで5万点はあったと思われる。19世紀半ばごろにもっぱら文芸の主題に当てられたジャーナルが千点以上あった。同時期、イギリスと併行して文化的に「ヴィクトリアン」と形容詞が付されるアメリカ合衆国でも、1850-65年の期間に発行された雑誌は2500点にのぼった。それは、経済恐慌（1857年）と南北戦争という阻止的効果が起こっていたにもかかわらずである。

世紀中葉のイギリスにおける相対的に廉価な定期刊行物の急増をめぐる一般的要因には、識字率の漸次的拡大や技術上の進歩改良（所謂「印刷革命」や販売網・通信網の拡充等）、さらに1855年の印紙税の廃止などが挙げられる。とりわけ「女性読者」の成長は、読書行為に専念できる非労働時間（余暇）を女性に与えたミドルクラスの経済力の上昇の結果でもある。

そのような定期刊行物の急成長という、ヴィクトリア時代の特異性は、まさに『ヴィクトリアン・ペリオディカルズ・レビュー』（VPR、季刊、現在39巻を数える）という、当該時期に限定した定期刊行物研究の評論誌の存在によって立証されている。本稿で取り上げる書物の作者ジェニファ・フェグリ自身、VPRの常連寄稿者（たとえば33巻1号および38巻2号）でもあり、さらに今年から同誌の刊行母体であるRSVP（ヴィクトリア期定期刊行物研究協会）の理事の一人にもなっている。

ところで、J・ラスキンは『胡麻と百合』の中で、親たちに「現代の雑誌や（それが連載する）小説を皆様のお嬢さまがたの目に触れないところにのけておきなさい」と警告を発したが、この言葉は、定期刊行物と女性読者の危険な結合について表明された19世紀の文芸評論家の典型的な懸念を例示している。実際、雑誌産業の盛行が、専門職としての文芸評論家を成

り立たせ、彼らが、読者に適切な図書を選ぶように、そして「正しい」やり方で読むように指導することをその使命として受け止めたのであるが、とりわけ「読書する女性」についての辛口の心配、さらには女性の読書行為の規制を求める新しい言説を提示したのである。実際、19世紀の女性の読書行為の危険性についてのヴィクトリア朝男性の言説はちょうど今日の子どもたちを暴力的なテレビ番組やビデオ・ゲームに曝すことを問題視する討論とよく似ている。

しかし、フェグリは、そのような女性読者像が当時大衆に示された唯一のイメージではなかったと反論する。彼女は、新しい種類のミドルクラス向けの雑誌が相次いで創刊された1860年代に的を絞る。定期刊行物の研究者は、これらを「シリング月刊誌」と呼んで、世紀末の大衆誌の到来を先触れする新種のジャーナリズムの出現と捉えている。これらの雑誌は、連載の小説とふんだんな（しばしば多すぎるほどの）挿絵をそのセールス・ポイントとしており、またフィクションと論説の双方を扱っていた。

フェグリは、ミドルクラス女性が広く読んだ4点のヴィクトリア時代中期の雑誌、『ハーパーズ・ニュー・マンズリー誌』、『コーンヒル誌』、『ベルグレイヴィア誌』、『ヴィクトリア誌』を取り上げて、そこに現れた論考に焦点を当てつつ（ただし、それぞれの雑誌の創刊後5年間の論説に絞る）、19世紀の女性読者と文芸批評家の関係について吟味考察を加えた。4誌のうち、『ハーパーズ』はアメリカの雑誌（1850年創刊）で、あとの3誌は全て1860年代にイギリスで創刊された「シリング月刊誌」である。

フェグリが、女性を「危険な読者」とする当時の批評家の支配的態度を論駁して、ヴィクトリア時代中期における「適正な」女性読者の育成に関わったとして取り上げた上記4誌については、アカデミックな先行研究も多く（ただし『ヴィクトリア誌』の研究は稀少で、フェグリはVPR掲載のS・ロビンソンの論文にもっぱら負っている）、それらを網羅的に誠実に依拠しつつ論を進めているのが、門外漢にとってはむしろやや煩雑で著者の論点が把握しにくくなるきらいもあった。

フェグリの論旨のまず第一の特徴は、『ハーパーズ』以外の、1860年代生まれのイギリスの3誌（実際にはかなり異質なジャーナル）を相互に関係づけて論じるために、「家庭向け文芸雑誌」（family literary magazine）という用語を案出したことにある。

フェグリのもう一つの、かつユニークな特徴は、1850年代にアメリカで創刊された『ハーパーズ』を彼女の論考の起点として注目し、そこから議

論を展開したことにある。彼女は、『ハーパーズ』が19世紀の出版政策や複雑なジェンダー政策を通して、イギリスの雑誌が10年後に踏襲することになる指針を提示したと論じる。つまり、同誌は、読者層を女性に絞り、「優れた文芸文化の発展にとって、決定的な役割を担っているのは女性たちである、という主張がぐらつくことはけっしてなかった」(p.50)。フェグリの論旨は、『ハーパーズ』がその女性読者を適切に趣味よく教育し、その趣味が今度はその家族にしみ込んでいき、文化的に健全な社会を保証したとする。しかし、アメリカのミドルクラス向けの文芸雑誌(どの程度イギリス文学を吸収していたのだろうか)と1860年代のイギリスの文芸雑誌の激増との関係がいまひとつ明らかにされてはいない。

フェグリが「家庭向け文芸雑誌」という命名で伝えたかった中心的な要素は何か。まず、これらのジャーナルが家庭で読まれることを意図しており、したがって想定される読者はミドルクラスの家庭を管理する女性たちである。家庭を守る女性の役割・任務は、イギリス「国家の家族」の身体的・文化的健康を保証することであったから、敷衍すれば「国家」「国民」そのものの健康を保証することであった。つまり、フェグリによれば、「家庭向け文芸雑誌」の重要な機能は、読書行為を女性たちにとって有害であるとみなした当時の批判を減殺する努力として、女性読者(あるいは読書する女性)の積極的イメージを創り出すことであった。実際、女性の読書という現象についてゆきわたっていた世の不安とは反対に、これらのジャーナルは女性読者に文芸文化におけるポジティブで有力な地位を与えたのであった。またそれらの雑誌は結局、女性たちに私的な生活面であれ、職業的生活であれ、より大きな機会を提供する援助をしてくれたという。

さらにまたフェグリは、これらのジャーナル類の丹念な考察を通して、女性たちを19世紀の文化的討論に参加させ、とくに文芸の規範や、「ハイ・カルチャー」と「ロウ・カルチャー」、そして「リアリズム」と「センセーションリズム」のような対立的用語の定義を定めるのに、「家庭向け文芸雑誌」が主要な力を発揮したと示唆している。

フェグリは、「あとがき」で自らの議論を要約しながら、4誌が果たした個別の役割を、それぞれの女性読者を形容する簡潔な、含蓄のある言葉で『ハーパーズ』に窺える女性読者はinfluential、『コーンヒル誌』の女性読者はintellectual、『ベルグレイヴィア誌』の女性読者はindependent、『ヴィクトリア誌』の場合はフェミニスト的な女性読者および批評家とイメージを表現している。同じ「あとがき」で、女性たちが19世紀中葉に為した

前進にもかかわらず、世紀末には女性は文芸上の読者・著者・批評家としての発言を弱められ、表舞台から閉め出されていったという重大な逆行現象がほとんど示唆的に言及されていて、これは今後の検討課題であろう。

フェグリが最後に取り上げた『ヴィクトリア誌』は、その編者のエミリー・フェイスフルの伝記研究や、女性のための印刷所「ヴィクトリア・プレス」をその活動の一端とする第一波フェミニズムの結社「ランガム・プレイス・サークル」の研究の中でいくらか論じられてきたが、同誌そのものの先行研究は前述のロビンスンに限られる。それゆえ、「家族向け文芸雑誌」の現象の一つとするには、かなり異質な進歩性・革新性をも有した同誌の役割を、評者のフェミニズム史への関心からも付言しておきたい。何よりも『ヴィクトリア誌』は初期フェミニズムのジャーナリズム、とくに『イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル』(EWJ)の編集・運営の困難とランガム・プレイス・サークル内部の緊張の中から生み出されたが、EWJとの関係は強力で、ランガム派の多くが寄稿していたし、「社会科学振興協会」の傑出した男性寄稿者も多かった。フェミニズムの諸課題の論説や諸協会の活動報告も含んだ。しかし、ほとんど「文芸」には誌面を割かなかった硬派のEWJと対をなして、ランガム派のより保守的な部分を代表しつつ、60年代の改革に対して慎重な、しかしEWJより有力な発言のフォーラムとなりえたといえよう。

本書は、概して読みやすく、綿密にリサーチがなされ、また明晰に論証されている。上記の4誌の他『パンチ』と『絵入りロンドンニュース』などからの12点のイラストは、著者の論証を適切に強化・例証してくれているし、巻末のビブリオグラフィも包括的で、読者の助けとなる。まさに、ヴィクトリア朝文化研究の徒には、きわめて有用な研究書であろう。

本書通読ののち、過去の「女性読者」そのものに迫る研究は、成り立ちにくいと妙に実感した。実際、現在の私たち同様、文芸雑誌を購入したり、読んだりした過去の女性が、いかなる読み方をしたかは明らかにしがたい。あちこち拾い読みをしたか、あるいは最初から最後まで完全に読み通したか。販売部数以外には層としての「読者」を捉えることは不可能であろう。フェグリは、賢明にもそのような落とし穴にはまらずに、文芸文化におけるジェンダーの本質と女性たちの位置づけ(必ずしもマージナルなものではなかった)を雑誌における言説を通して再現したといえよう。

(京都府立大学教授)

## 片木篤 『アーツ・アンド・クラフツの建築』

(鹿島出版会 S D 選書241、2006年)

高橋 哲雄

### 1

「アーツ・アンド・クラフツの建築」といえば、わが国での根強いモリス人気。今年も会員の露木紀夫氏によって大阪にラスキン・モリス・センターができた。から、手頃な日本語の研究書、啓蒙書がいくらかもあるように見えるかもしれない。しかし、アーツ・アンド・クラフトは一義的には美術工芸、インテリアの手作り運動なのであって、「建築」となると、不可分の関係にありながら、意外に正面から取り上げた研究はないのである。建築史の側でも「アーツ・アンド・クラフトの建築」という括り方が定着しているとはいえない。

その意味で、このテーマ設定自体がなかなか魅力ある試みなのであるが、著者片木篤氏はそれをすでに22年前の処女論文で行なっている（「アーツ&クラフトと世紀末のイギリス建築」『S D』、1984年2月）。今回 S D 選書の一冊として書き下ろすに当たって、著者はそれを下敷きに大幅に改稿された。

SD選書というのは建築の世界では百科全書的性格を持つ歴史のある叢書で、かつては建築の学生はもちろん、多少なりと建築に関心のある人士にもなじみ深かった。一方では、定評のあるクラシックでありながら入手しにくいもの（たとえばハワード『明日の田園都市』）を収録するとともに、百科全書としては落とせないテーマについての書き下ろしも入れている。ここでは当然、専門知の現在の到達水準を平明に、バランスよく、かつコンパクトに伝えることが要求される。

そういう課題が果たせるのは、当然その分野の実力者ということになる。片木氏は、研究の出発点をアーツ&クラフト第3期を代表する建築家エドウィン・ラッチェンズに定め、その位置づけのためにアーツ&クラフト運動や当時のイギリス建築の全貌をとらえようとし、また「折衷主義」とか「経験主義」の大家といわれる彼の作風の源泉を探るために、住宅建築の分野に探究の手を伸ばした。その成果は『イギリスの郊外住宅 中流階級

のユートピア』(1987)、『イギリスのカントリーハウス』(1988)の2著にまず結実し、また住宅 住宅地 都市とつづく氏の探究は『テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン』(1995)を生んだ。

中味が濃いのに親しみやすいこれらの著作は、類書がほとんど存在しなかった時代に、私にとっては旅のプランづくりの、またとない好ガイドであり、また小著(『イギリス 歴史の旅』1996)の執筆にさいしては得がたい知的刺激と豊富な材料を提供してくれた。氏の新著を手にしたときの期待のほどが察していただけよう。

## 2

しかし、本書は予想をある面では快く裏切って、教科書型の本にならず、百科全書論文としても相当に著者の個性をにじませた野心的なものとなった。全体の構想においても、叙述の細部についてもそうなのである。まず、全体構成から。

本書がとりあげた時代は1860年代から1914年、つまりヴィクトリア朝後期からエドワード朝である。それがアーツ・アンド・クラフツ建築の盛時に重なる。著者は次のような章別構成にしたがって、その系譜を解き明かす。腑分けは精細巧妙をきわめるが、ここではほとんど目次を並べる程度に留めざるをえない。

第1章「レッド・ハウスからケルムズコット・マナーへ」はモリスの建築論とウェブの成果から説き起こし、第2章「オールド・イングリッシュ様式からクィーン・アン様式へ」は、大建築家ノーマン・ショーを中心に、これらの様式の流れを紹介する。第3章「様々なギルド」では、モリスの直系ともいべきレサビーやギムスン、アシュビーといった人びと、アート・ワーカーズ・ギルドやアーツ・アンド・クラフツ展示協会といった組織が登場し、彼らを支える社会層が示される。第4章「ホワイト・コテージ」では、現代建築の源流とされることのあるヴォイジーやベイリー・スコットらが、第5章「より高度なゲーム」ではラッチェンズと、彼に影響を与えた名造園家ジーキルが登場する。第6章では世紀末グラスゴウのマッキントッシュらが、最後の第7章ではエドワード朝ロンドンへ飛んで、そこで繰り広げられるルネッサンスやバロック・リヴァイヴァルの多様な試みが紹介される。

全体を通じて多数の建築家の活躍ぶりとそれぞれの作風が、145にのぼる豊富な図版を使って生きいきと描かれ、彼らの間の複雑な影響・継承関係



がみごとに浮かび上がってくる。アーツ・アンド・クラフツ運動の多様さがよく理解できる。

ただ、こうしてみると「アーツ・アンド・クラフツの建築」とは何かという疑問が改めて生まれてこざるをえない。たとえば、第6章のマッキントッシュらグラスゴウ4人組は、あまりに個性的、耽美的であるため、アーツ・アンド・クラフツ展示協会によって出品を拒否されるなど、異なった流れに立っているという見方がむしろ一般的である。しかし、著者は彼らを近代建築のパイオニアととらえるよりは、スコットランドの伝統建築の一つであるスコティッシュ・バロニアルの個性的な復活ととらえ、そこに地方の知られざる伝統的建築の再発見を活動の柱としたアーツ・アンド・クラフツと通底するものを見出そうとした。それは著者の貴重な発見といってよいのだが、氏自身の定義となじむのだろうか。

片木氏は「アーツ・アンド・クラフツ建築」を次のように定義している。中流階級の核家族形成による職住分離を氏は「モダン・ライフ」と呼び、それを背景に、分離された「職」と「住」を収める新たな建築が要求されるようになり、そうした要求に対して確たる思想をもってトータル・デザインしようとした最初の試みの成果物がそれだというのだ。この箇所は抽象的でわかりにくいだが、全体の記述からみると、「トータル・デザイン」とは始祖モリスのいう建築、彫刻、絵画の統合、芸術と生活の統合、あるいはラッチェンズとジーキルの試みた「建築の内と外の総合」を指し、「確たる思想」とは、地方色の尊重、伝統の再発見、無名の職人芸の発掘、材料や工法への誠実さ、芸術以前の生活・社会の重視、社会変革志向、様式へのこだわりのなさ、といった一繋がり主張を指すものと思われる。

マッキントッシュらの仕事は無名の職人芸の発掘ではなく、芸術以前の生活や社会の重視ともいえないけれど、その華やかな国際性とうらはらに、実は伝統的な地方色の復活再現という側面があるのだとし、それによってアーツ・アンド・クラフツ運動を広くとらえ、そのゆたかな多様性を示そうということに片木氏のメッセージのひとつの眼目がある。

同じことは後期ラッチェンズをアーツ・アンド・クラフツに含めた意味のなかにも読みとれる。彼の出発点がアーツ・アンド・クラフツにあったことは確かだが、貴族の娘と結婚し、大きな注文が取れるようになるにつれて、それにふさわしいとされた古典主義様式に移るようになり、最後にはニューデリーのインド総督府のような、まさに帝国主義の時代を代表するモニュメンタルな建築を手がけるまでになった。そこには、アーツ・ア

ンド・クラフツらしい求道的な社会改革もなく、匿名性も、手造り志向もない。

しかし片木氏は、現実主義者ラッチェンズの折衷主義を、普通の見方とちがって積極的に「知的ゲーム」と読み替えることで様式の問題をクリアした。彼にとって様式はせいぜい二次的な意味しか持たず、古典主義のほうがヴァナキュラーよりいっそう高度のゲームが楽しめるから移ったにすぎず、アーツ・アンド・クラフツの本質的な要素は残しているというのである。ここでもアーツ・アンド・クラフツの建築のゆたかな多様さが強調されるのである。

アーツ・アンド・クラフツ運動をその周辺を含めて広くとらえようというこうした視点は、通説とされてきた建築史家ペヴズナーへの疑問から発している。それは、現代に生き残ったものを繋ぎあわせて「主流」を浮かび上がらせる建築史上の「ホイッグ史観」であり、「時代精神」の名のもとにこの時期の建築の個人主義的で多元的な展開や、出版、教育、職能団体の輩出など情報化、制度化の新しい動向を意図的に排除してきた、と批判するのである。本書は、小冊ながら、ペヴズナーに取って代わるあたらしい通説の、少なくとも輪郭を提示しようという野心作である。

### 3

片木氏の描き出したアーツ・アンド・クラフツ像の斬新さは全体図だけのことではない。それを支える細部の充実がある。ラッチェンズについてみた折衷概念の巧みな使用もその一つであった。ウェブについては様式に無頓着な結果としての折衷主義であり、ショーについては意識的な操作として様式の混合、つまり折衷を行うという区別をつけることで両者のちがいをあざやかに描き分けた。

もう一つだけ例を挙げる。ウェブの設計したモリスの自邸レッド・ハウスは従来近代住宅の嚆矢と位置づけられ、アーツ・アンド・クラフツの原点とみなされてきたが、片木氏によると、重要なのは後期ウェブの作品であって、レッド・ハウスは恩師や先輩の作品を模した未熟な処女作であるにすぎないというのだ。これには初めから度肝を抜かれるが、それが氏の単なる思い付きではなく、研究史の周到な渉獵から導き出されたことはすぐさま明らかとなる。

著者には建築史家の顔だけでなくデザインの専門研究者の顔があり、住宅構成の解説などにその一端が示されているが、それを含めて氏の持ち味

と力量を存分に生かすには、このスペースでは十分ではなかった。図版ももっと大きくした「完全版」を期待したい。とはいえ、このサイズでアーツ・アンド・クラフツの、主な作家と作品が鋭利なコメント付きで早分かりできるのも、読者にとっては有難い贈物といわねばならないだろう。

(甲南大学名誉教授)

菅 靖子 『イギリスの社会とデザイン  
モリスとモダニズムの政治学』  
(彩流社、2005年)

谷田 博幸

本書を読みながら、ふと、今からちょうど十年ほど前にロンドンの王立英国建築家協会（RIBA）建築センターで開かれていたある展覧会のことを思い出していた。確かSomething Worth Keeping? と題されていたかと思う。1984年以来、歴史的建造物の顕彰・保存に取り組んできたイングリッシュ・ヘリテージは、その当時、保存の対象を第二次世界大戦後の建造物にまで広げる方針を打ち出し、喧しい議論を巻き起こしていたが、その展覧会はそうしたイングリッシュ・ヘリテージの新方針に対して一般のコンセンサスを取りつけるべく催された展覧会の一つだった。そこでは「戦後の住宅危機に対する革新的かつダイナミックな解決策であったのみならず、現代の生んだ最良の建造物」として戦後に建てられた公営アパートの保存が声高に叫ばれていた。ついに、戦後の公営アパートにまで保護の手が差し伸べられるようになったか、と一驚したものだだったが、当時も若手の批評家を中心に、そうした際限のない文化遺産の保護に対して、英国の文化的保守性をさらに助長し、新たな文化振興の妨げになるものだとして危機の声があげられていたと記憶する。1895年に始まるナショナル・トラスト

も、比較的歴史の浅いこのイングリッシュ・ヘリテージも、いずれもウィリアム・モリスの古建築保護運動に起源を持つ、いわば「モリスの遺産」なのだが、ちょうど時を同じくして開催されていたモリス展（V&A美術館）の会場で華々しく讃えられているこの「モリスの遺産」が、その一方で新しい創造活動の障害として槍玉に挙げられていることに、モリス没後100年の歳月を思わないではいられなかった。英国は今もって「モリスの遺産」を前に揺れ動いているのだった。

本書が主眼に据えているのも、この「モリスの遺産」をめぐる一つのストーリーである。つまり、1830年頃から英国ではとりわけ隣国フランスと比較した工芸デザイン分野の立ち遅れが指摘され、「よき趣味」の涵養と対外的な競争力を有する装飾工芸の育成が国家的急務の一つとなっていた。間もなく、ロンドンをはじめ地方産業都市にデザイン学校が創設され、国がデザイン教育に乗り出したが、一向に功を奏する気配が見えなかった。1851年、産業最先進国の威信をかけて開催された大博覧会は、世界に対して英国の未曾有の発展と物質の繁栄を見せつけることになったものの、果たして英国の工芸デザイン分野の劣悪ぶりは歴然としていた。そこへデザイン教育改革に乗り出したのが、博覧会の大立者 H・コール（1808-82）だった。かれは政府機関として実用美術局を立ち上げ、全国のデザイン学校の再編に着手するのみならず、装飾美術博物館（現在のV&A美術館）を創設することによって、英国民に「よき趣味」の基準を示したのだった。しかし、結局、英国のデザインを窮地から救ったのは、20年余りに亘って美術教育行政に辣腕を振るったコールではなく、一人のデザイナーの登場であった。ウィリアム・モリス（1834-96）である。英国はモリスの登場によってようやく長いデザイン・コンプレックスの時代から抜け出すことができたのだった。モリスのデザインと手仕事の復権を説くかれのデザイン思想は、多くの共鳴者を生み、英国はアーツ・アンド・クラフツ運動の隆盛を迎えることになった。やがて、モリスのデザイン思想は、20世紀初頭のドイツ工作連盟やバウハウスなど大陸のモダン・デザインの動向に大きな影響を及ぼしたものの、英国内ではその手仕事に対するこだわりが機械生産を前提とするモダン・デザインの浸透の障害となり、20世紀前半の英国デザインは、モリス的伝統とモダン・デザインの革新との間で逡巡を繰り返すことになった。つまり、「モリスの遺産」は、英国的な趣味とクラフツマンシップの伝統というナショナル・アイデンティティを表象する一方で、モダニズム受容に対する臆病さを生んだ最大の要因と目されることになっ

たのである。

こうした近代英国デザイン史のストーリー自体は、別段目新しいものではない。これまでも幾度となく語られてきたし、菅靖子氏の本書も大筋でこのストーリーに書き換えを迫るものではない。むしろ本書の特色は、「よき趣味」をめぐる言説の権力性を見据えた上で、英国のデザイン文化を「趣味の統制機関としての博物館、デザイン教育・振興機関、デザイン改革運動、そしてそれと製造業界あるいは政府との関係、さらには日用品や雑誌や広告デザインの消費文化」といった重層的な観点から再検証することによって、このストーリーを「モリス的なもの」と「モダニズム」の表象のポリティックスへと読み替えようとしたところに求められるだろう。

本書は、英国がデザイン分野の立ち遅れを自覚した1830年代からモリスの登場を経て、一つのナショナルなスタイルが形成されていく過程を扱った第一部（1～3章）、19世紀末から20世紀前半のアーツ・アンド・クラフツ運動とモダン・デザインとの間の葛藤を扱った第二部（4～7章）、国家によるデザインへの介入とナショナルな表象装置としての展示の問題を扱った第三部（8～10章）、モリスが文化的遺産（ヘリテージ）と化していく過程を扱った第四部（11～12章）の全四部12章から構成されている。また、各章で扱われる主題も、H・コールからデザイン学校マンチェスター校、C・R・アシュビー、デザイン・産業協会（DIA）、スウェーデンのスロイド協会、ヒール商会、英国産業美術協会（BIIA）、ライマン産業・商業美術学校、モリス商会、レッド・ハウス等々と実に多岐に亘る。確かに既発表論文をベースにしたために多少未整理な感を否めない部分もないではないが、それらの多彩なモチーフを縦横に論じながら英国の近代デザイン界の権力構造を解き明かしていく著者の並々ならぬ力量には正直感嘆させられた。

ただ、そこに私なりの不満がないかと言えば、そうでもなかった。一つは、著者が表象としての「モダニズム」とモダニズムの本態とを必ずしも厳密に区別し切れていないところに原因があるように思われる。したがって、インターナショナルなモダニズムを唯一の最終ゴールとして描き出されるペヴズナー流の進歩主義的な近代デザイン史観への反省を謳いながらも、20世紀前半の英国デザイン史を大枠でモダニズムとモリス的伝統の葛藤として読み解く段になると、今なおどこか一枚岩的なモダニズム観への信仰を強く疑わせてしまうようなところが残ってしまうことになる。「装飾への反動、機械の賛美を特徴とするデザインのモダニズムは、少なくとも理論においては、脱階級、脱地域、ユニバーサリズム、民主主義を標榜し

ていた」(149頁)と語られるとき、ここに言うモダニズムは決して表象としてのそれではない。モダン・デザイン=反装飾・機械の美学といった手垢のついた公式に囚われ続けていることばかりが問題なのではない。「装飾への反動、機械の賛美を特徴とするデザインのモダニズム」と言い切ってしまうところには、かつてP・グリーンハルシュが『デザインのモダニズム』(1990)の序で「デザインのモダニズムとは何か」という難問解決の手始めとしてまず複数のモダニズム、モダニズムの相対化の必要を説いたような問題意識の切実さは微塵も感じられないのである。機械生産を前提とし、装飾性を排したデザインがモダン・デザインならば、20世紀を俟たずとも、既にして19世紀の英国に存在した。実用本位の機械生産による機能的なデザインが、ヴィクトリア朝を通じて嘗々と生み出され続けていたことは、既にH・シェーファーが『モダン・デザインのルーツ 19世紀における機能主義の伝統』(1970)で明らかにしたところだ。問題は、モリスがそうしたものづくりとは全く別の地平でデザインを始めたことだ。つまり、これがもう一つの私の不満ののだが、そもそもモリスのデザイン運動は、その中世趣味も含めて 画壇に見られたアルカディアニズムや、環境保護運動などととも に 19世紀後半の英国社会でさまざまな形で現れることになる産業主義への抵抗運動の一つとして生まれたという側面が、この著者にはおよそ理解されていないのではないかということだ。そして、今日「モリスの遺産」が何がしかの意味を持つとしたら、そうした理解なしにはあり得ないのではないか、というのが私の意見である。

最後に、本書の特に19世紀を扱った前半部分に幾つか思い違いや誤りが散見されるので指摘しておきたい。ハリー・ショウの『装飾事典』は、ヘンリー・ショウの誤りであるし(28頁)、『家庭の趣味に関する提言』(1868)を著したのは、「画家チャールズ・(ロック)イーストレイク」ではなく、全く同姓同名の建築家の甥である(30頁)。また、ラルフ・N・ウォーナムは、ナショナル・ギャラリーの保管人(keeper)を務めたことはあったが、一度も館長になったことはない(38頁)。さらに、『センチュリー・ギルド・ホビー・ホース』誌は、確かにA・H・マクマードによって創刊されたものだが、表紙を飾る木版の肉太の線に言及する以上、図4-1の作者名はマクマードではなく、S・イミッチとすべきだろう(121頁)。

(滋賀大学教授)

## 本田毅彦著 『大英帝国の大事典作り』

(講談社選書メチエ、2005)

岡 照雄

『オックスフォード英語辞典』(OED)と『イギリス国民伝記辞典』(DNB)は、私が長年にわたりしばしば利用し、親しんできた辞典で、『ブリタニカ百科事典』も折に触れて世話になる事典である。特に『オックスフォード英語辞典』はただの辞書ではなく、私にはドイツ語でいう Hilfsmittel、お助け人である。ところが、それほど大事な三冊について、その成り立ち、執筆者、編纂者、出版社のことを私はほとんど知らなかった。ただし、OED に関しては、Simon Winchester: *The Meaning of Everything* (2003) が苅部恒徳氏の翻訳のおかげでサイモン・ウィンチェスター著『オックスフォード英語大辞典物語』(2004)として研究社から出版されたので、私は初めてこの辞書の来歴について知ることができた。このたび本田毅彦氏の『大英帝国の大事典作り』を読んで、異なったコンテキストで多くのことを教えられたので、この機会に著者の本田氏に感謝申し上げると同時に、苅部氏の翻訳書も併せて読まれるように読者の方々にお薦めする。

本書は五つの章から成り立っている。序章は、「イギリス社会における「知」のインフラ - 辞書・事典作りの伝統」と題し、本書全体の目的を提示する。「これら三つの辞書・事典がどのような背景のもとで、どのような経緯にもとづいて編纂されたのか、編集者たちが彼らの作品にこめた意図は何だったのか」を語り、三書の限界と問題点を指摘し、インターネット、CD化の時代下の現状と今後の運命を論じること、これが本書の目的であって、多くの利用者が関心を持つ主題である。この総論のあと、第一章から第三章まで、著者はそれぞれの事典、辞典に一章ずつを割り当てて、序論の目的に従い、資料を収集、駆使して詳しい説明に入る。最後の第五章は三書の現状と展望を語る、という構成になっている。ここで各章の概要を紹介するのはほとんど不可能なので、私が特に興味を感じ、印象を受けた事柄を中心として以下に記すことにしよう。

第一章は『ブリタニカ百科事典』の歴史を扱う。アリストテレスの時代から、西洋哲学者たちは「知識の体系化」を企てた、と著者はいう。知識の秩序付け、配置を考え、「知識の系統樹」の樹立が彼等の関心事であった。これに対して、十七世紀初頭に「知識のアルファベット順」による編纂、構成が浸透しはじめた。それは「秩序的で有機的構造を重視する世界観」から、「個人主義的で平等主義的な世界観」への転換である。この変動が近代的な百科事典の誕生をうながした、と著者は考えている。イギリスでは、王立協会の成立により新しい知見や研究法が社会的にも公認され、出版の自由も保障されてきた。百科事典成立の土壌とはそういうものであろう。1726年出版の『サイクロピーディア』、1751年にはじまり、80年に完結するフランスの『百科全書』の両書ともに、冒頭部分に「知識の系統樹」が掲げられていたにもかかわらず、その編成は主題別でなくアルファベット順で行われた、という本田氏の指摘は、パラダイムの転換期を示すものとして私にはたいへん面白かった。知識の急速な増大が体系化を妨げはじめた頃に百科事典の思想が出現したのである。この章は『ブリタニカ』の数多くの諸版についてその特色や版権の移動を詳しく説明している。

OED を論じる第二章は、イギリスにおける辞書編纂の歴史、その知的風土の解説にはじまり、サムエル・ジョンソンの『英語辞典』、グリム兄弟の『ドイツ語辞典』の歴史的意義を解明しているが、第三節に入ってこの辞書の企画者たちは編集者探しに奔走した末に、ようやくジェームズ・マリーに出会う。マリーはスコットランド生れのピューリタンで、父親は村の仕立て職人であった。『ブリタニカ』の「プロジェクト」を立ち上げた三人もエディンバラの住人で、アンドリュー・ベルはパン焼き職人の息子、コリン・マクファーカーは鬘作り職人の息子、そしてウィリアム・スメリーは石工兼建築請負師の次男である。OED の仕事に従事する前に、マリーはロンドン近郊にある中等学校のミル・ヒル校の教員であったが、この学校は1807年設立のプロテスタントの非国教徒の子弟のために設立された学校だという。当時はパブリック・スクールの一つに数えられたそうであるが、そうは言っても元々はいわゆる「非国教徒アカデミー」であろう。となれば、私は同じような学校で学んだもうひとりの「プロジェクター」のダニエル・デフォーの存在を指摘したくなるのである。彼の父親はもともとロンドンのローソク商で、ダニエルはシティの非国教的な雰囲気うちに、北郊外にあるチャールズ・モートンの「非国教アカデミー」に学んだ。そ



の後の彼の政治経済・ジャーナリズム・フィクションにおける超人的生産性、「プロジェクター」性は、マリーの辞書編纂活動の精神に通じるところがあるのではあるまいか。ミル・ヒル校のチャペルで彼は、「勤労の教義」と「神聖な導きへの確信」を生徒たちに説いたそうである。本田氏のこの書物、ウインチェスターの『オックスフォード英語大辞典物語』の双方で、「プロジェクト」がキーワードの一つになっていることは私にとってたいへん興味深いことであった。当時の辞書作りにも初期資本主義の精神が働いていたのである。また、当時のスコットランドの文化的地位についても著者は留意している。

こういう精神のあり方を、本田氏は「写本室の中の修道士」という見出しの部分で書いている。マリーは編纂作業のために自宅の裏庭に小屋を建て、それがやがて「写本室(スクリプトリウム)」と呼ばれるようになる。写本室とは、中世のキリスト教修道院で修道士たちが宗教文書のコピーに励んだ場所である。マリーのそれは湿気の多い粗末な部屋だったが、この「非国教的な修道院」がOED 作りの特色をよく表しているのではあるまいか。外壁は灰色、屋根は茶色の建物のことを、「まるでメソジスト派の礼拝堂のように見える」と言った人がいた、とウインチェスターは書き、当時の「写本室」の写真を掲げている。更に、本章第四節の、「OED に対する現在の視点からの評価・批判」には、現在の利用者が心得ておくべき事柄の指摘があり、著者の意見が披瀝されている。

続いて『イギリス国民伝記事典』(DNB) が第三章の主題である。編纂者のレズリー・スティーヴンは小説家ヴァージニア・ウルフの父親で、十八世紀英文学論、ポープ、スウィフトの伝記を書いているが、彼の主著の一つは大著『十八世紀イギリス思想史』である。イギリス思想といっても、彼の主な対象は十七世紀後半から十八世紀にいたる理神論・宗教的合理主義の思想家である。この研究を進めるうち、やがて不可知論に傾き、牧師の資格を放棄するレズリー・スティーヴンの思想がDNB 編纂方針に影響を及ぼしたと私は推測するが、そのプロセスを本田氏は示唆している。彼の家系の人々は勤勉と正義感に満ち、キリスト教福音主義の立場をまもった。レズリーの祖父のジェームズは社会改革に献身するクラバム派の有力メンバーになったという。ここにも非国教派の知識人の伝統が生きている。

レズリー・スティーヴンのあとを承けて編纂を担当するシドニー・リー

の自負心と使命感、情熱にレズリーは「あえて冷水を浴びせようとしているのではないかとすら思わせる」と本田氏は評しているが、これはレズリーの宗教と思想における転進を示すものであろう。彼は、国民的伝記の意義を認めながら、もっと冷静な価値基準を求めていた。イギリス史上の人物の研究にあたり、DNB は古文書の「泥沼」を渡るための「舗装道路」を果たすべきだ、と彼は述べたそうである。これは、いま日記作者のサミュエル・ピープスの研究をする私にとってはたいへん有難い方針である。ピープスの『日記』はもちろんのこと、この時代の党派的な政治家の著作に見られる政敵や同志の人物像は極端に歪んでいて、まさに「泥沼」である。まず舗装道路がないことにはどう進んでよいか分からない。自然破壊はいけませんが、伝記記述の舗装道路は絶対に必要である。

「三つの辞書・事典の現状と将来」と題する第四章でも、私には別の意味で貴重な情報を与えられた。私はインターネット、CD-Rom をどうやら操ることはできるが、これらのメディアの本格的活用はまだ未熟で、CD-Rom のOED は第一版のほうが使え易かったのではあるまいか、と今でも思っているくらいである。業界はどう変わってゆくのだろうか。そもそも『ブリタニカ』の版權を一時的ではあるがアメリカの通信販売業者であるシアーズ・ローバック社が所有していたことも私は知らなかった。第四章を読んで、三書をめぐるメディア環境とその見通しをつけることができた。

六十年前に留学生としてイギリスにいたころ、うっかり『ブリタニカ』の内容見本を申し込んだとき、販売員の訪問攻勢を受けて閉口したことがある。おなじころに、私は本書にも登場するノエル・アナン氏に手紙を書いて、彼の著書『レズリー・スティーヴン伝』につき質問させてくださいと図々しくも頼み込んで、秘書から鄭重に断られたことがある。アナン氏は当時ケンブリッジのキングスコレッジの長であったと思う。懐かしい思い出である。ついでに言うと、四十年近く前の大學紛争で私の研究室が占拠されたとき、大事なOED がまるごと盗まれた。やがて私は学校の近くの古書店の棚で同一物を発見したが、古書店、警察の対応もあってその後しばらくは後遺症の malaise に苦しんだ。その研究室はおそらく本田氏の先生である越智武臣先生の研究室に隣接していた。あの時の荒廃を本田氏はもちろんご存じないだろうが、これは私のOED の歴史である。辞典・事典のビジネス面についての面白い挿話や、国家・国民意識と辞典・辞典編纂の関係についても豊富な情報があるが、残念ながら割愛せねばならない。本

当はそこに著者の力点があるのかもしれないが。

(京都大学名誉教授)

## 松本 啓 『イギリス小説の知的背景』

(中央大学出版部、2005年)

鈴木 美津子

本書は、著者が40年以上にわたって様々な機会に発表してきた論考を集め、纏め上げた労作である。論考の対象になっている作家は、18世紀に活躍したダニエル・デフォーから19世紀後期の作家トマス・ハーディまで、総勢8人に及ぶ。

本書の目的は、大きくわけて二つある。「まえがき」で明快に述べられているように、一つは「神慮」(Providence)という語が18世紀の小説発生期からハーディに至るまでの約150年に及びイギリス小説に落としている影を分析することであり、もう一つは論じられている小説の「知的背景」を探ることである。本書は14章からなっている。「神慮」を論じているのは全部で8章。残りの6章が主に各作品の知的背景を考察している。紙幅の関係上、「神慮」を論じた章を中心に概観してみたい。

「慈悲深き神慮 モルの場合」と題された第1章では、副題から明らかかなように、ダニエル・デフォーの『モル・フランダーズ』を取り上げている。「18世紀の小説に影のように見え隠れする「慈悲深き神慮」とはいったい何者であろうか。そして、果たして、それは当時の小説のリアリズムなり構成なりと何らかのかかわりあいをもつものであるか」(p.5)という問題提起から始まり、女主人公モルの人物造形を具体的に跡付ける。モルは生きるために次々と悪事に手を染めるが、「神」は決してモルを見捨てない。モルが死刑を免れるのも、植民地に送られ、息子に再会し、農園を贈られるのもひとえに「慈悲深き神慮」のなせる業である。ようするに、『モル・フランダーズ』における「神慮」はデウス・エクス・マキーナとし

て余儀なく登場させられたものであり、「慈悲深き神慮」はいわば隠れミノであり、現実家デフォーは「神慮」という隠れミノを用いて、屈折した形で自己正当化を行わざるをえなかったと松本氏は結論づける。

第2章「慈悲深き神慮 パミラの場合」では、サミュエル・リチャードソンの『パミラ』を取り上げ、「18世紀前半の時点において、宗教的であることやピューリタンのであるということは一体どのようなことを意味したのか、さらにはまた彼らの〔神慮に対する〕「強い信念」がいかなるプラスとマイナスをもたらしているのか」(p. 30)という観点から、「慈悲深き神慮」の強調が『パミラ』の筋立てと登場人物の性格づけに与えた影響を考察し、女主人公パミラには「神慮」の名において私利私欲の追及を正当化する、恐るべきほどの自己中心的な精神構造の一典型が見られると論ずる。『パミラ』の面白さは、「徳はこの世で報われるという、ぬけぬけとした確信を、神慮という隠れミノで正当化しようとする心理の過程を、裏側から覗くところから生じるのである」(p. 47)という指摘は示唆的である。

『ジョゼフ・アンドリュース』を論じた第3章は、「ヘンリー・フィールディングの背景」と題されている。『ジョゼフ・アンドリュース』においては、神(God)という言葉が、しばしば用いられるが、「神慮」という語はアダムズ副牧師の息子の教会での昇進の場面など、ごく稀にしか用いられていない。フィールディングが「神慮」という語を多用しなかったのは、国教会広教派の説教師たちへの信頼が厚かったこと、そしてデフォーやリチャードソンなどの非国教徒に近い作家と違って「神慮」を正当化のために用いる必要性を感じなかったためであると結論づける。

「ジェイン・オースティンと神慮 『マンスフィールド荘園』と『説得』をめぐって」と題された第8章は、「神慮」という語を手がかりにして、ジェイン・オースティンが置かれていた歴史的位置について考察しようとするものである。『マンスフィールド荘園』において、一度だけ用いられる「神慮」という言葉は、主人公のエドマンドが物語の最後で口にするもので、この物語の結末を正当化するために使用されており、その限りにおいては18世紀の作家達の延長線上にあると言える松本氏は指摘する。一方、『説得』においては、超自然的な「神慮」に全面的に寄り掛かることは否定されており、その意味では「『説得』は近代小説の方向に一步足を踏みだしているといえよう」(p. 165)と述べ、「国教会中心の教区に生きたオースティンは、「神慮」を真っこうから否定するには至らなかったのである」(p. 166)と指摘する。この結論に至るプロセスを、当時の宗教的・社会的文脈に依

掘しつつもう少し具体的に跡付けていただきたかった。

第9章「慈悲深き神 薄幸の少女ネルの場合」では、チャールズ・ディケンズの『骨董屋』を取り上げ、この作品では神を示す語としてはGodが用いられているが、10回前後Heavenという言葉も使用されている。「神慮」という語は一度だけしか使われておらず、しかも口にするのは、悪徳弁護士ブラスである。このことは「ディケンズは、おそらく、良き国教徒であった……ディケンズは、そして当時の読者の多くは、神とその摂理を信じていた（あるいは信じるふりをしていた）」(p. 183)ことを示していると結論づけている。

第10章「理想と現実の狭間 『ミドルマーチ』をめぐって」では、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』で言及されている「神慮」を分析している。この小説の第61章では、信仰を隠れミノにして破滅への道を進む銀行家のニコラス・バルストロードに関して「神慮」という語が4回使用されていることに着目し、バルストロードはモルヤパミラの変種といえるが、その彼が断罪されていることに時代思潮の変化の表れを読み解くことができると論じる。

第12章「トマス・ハーディと「神慮」 『はるか群衆を離れて』をめぐって」では、「神慮」を手がかりにして脇役のウェザベリーの村人達の信仰とその意味するところを考察している。この小説では「神慮」という語は5回使用されているが、そのうち4回はジョージ・プアグラスが口にしている。フランシス・トロイの描写にも「神慮」という言葉が用いられているが、この「神慮」はハーディの見解に最も近いものであり、ここに立ち現れている「嘲笑する<神>」(p. 239)は、「神慮」のゆくえを暗示するものと思えると松本氏は分析する。

第14章「"To Please his Wife"と慈悲深き神」では、ハーディ的な偶然的要素が強く働いているとされる短編小説、『人生の小さな皮肉』所収の「妻ゆえに」を取り上げ、慈悲深いものとされてきた<神>が無慈悲なものになり変わる、つまり「慈悲深い神」を否定するに至る経緯を検証している。実は、この最終章の後半部分は、いわば本書の「神慮」を論じた章のいわば、総まとめ、結論のような体裁になっている。神の摂理のゆくえを辿った結果、「おぼろげに浮かび上がってくることは、デフォーの「神頼みの世界」がオースティンの「人間中心の世界」へと移行し、やがてそれがハーディの「神なき世界」へと暗転するプロセスである」(p. 283)と結ぶ。

以上、「神慮」を論じた章を中心におおまかに辿ってみた。構成上、少々

気になったところを記してみたい。最終章の後半部分でなされる「神慮」にかんする総まとめは、章を改めて独立した結論のようなものにしたほうがよかったのではないかと。また、本書のキーワードである「神慮」という語の定義や機能の分析などは、各章で折々に散発的になされている。たとえば、第3章では、神慮は「非国教会派に近い小説家たちが神をあらわすのに用いた」(p. 66) 語であり、「窮地に陥った信者の危難を慈悲深くも救いたもう存在」(p. 66) であると定義されている。第8章では、「あの世」の絶対的な權威によって「この世」の個人的利益を正当化しようとするもの」(p. 152) という説明があり、第9章その他ではOEDのProvidenceの項の紹介がなされている。また、第10章では、18世紀のデフォーやリチャードソンのような作家達の小説においては「神慮は神を信じる主人公や女主人公を窮地から救い出す「慈悲深い」神の働き」(p. 204) をする、と小説における機能が分析されている。たとえば、序章のようなものを設けて、「神慮」の定義、歴史的変遷など、おおまかな見取り図のようなものがあらかじめ提示されていれば、重複が避けられ、より明快になったのではないかと。

ともあれ、きわめて大きな視野のもと、18世紀から19世紀後半の代表的な小説に現れた「神慮」の分析と知的背景を探った本書は、著者の長年にわたるイギリス小説研究からにじみ出る知見と蘊蓄が随所に見られ、教えられることが多かった。

(東北大学教授)